

2011年9月

サポーツ やる気 up アンケート調査

第二回報告書

同志社大学こころの生涯発達研究センター 田中あゆみ（心理学部准教授）

○調査の目的

このアンケート調査は、サポーツでよりよい指導を行うために、生徒の皆さんの全体的な学習意欲の現状を把握することを目的としています。学習意欲を複数の側面からとらえ、中・長期的な視点で検討します。今回の報告書では、2010年9月と比較した2011年4月の定例アンケートの結果と、半年間の変化について報告します。

○調査に用いた項目の内容

2010年秋の第一回報告書で説明したように、アンケートは＜学習一般について＞＜サポーツでの学習について＞の2つのパートに分かれています。次に説明するように、学習意欲の3つの側面と、サポーツという環境に対する評価を全10項目で調べました。それぞれの詳細は第一回報告書も参照して下さい。

＜学習一般についての質問項目＞

「勉強することは、楽しいと思う」

勉強することへの興味や楽しさといった“内発的動機づけ”を調べる項目です。

「勉強することは、将来役に立つことだと思う」

一般的な勉強への価値づけを調べる項目です。

「自分は「勉強ができない」と思う」「自分にとって勉強することは無駄な努力だと思う」 (←「全くそう思わない」が4点、「とてもそう思う」が1点)

この2項目は、勉強してよい結果を得られるという一般的な見通しである“自己効力感”を調べる項目です。

＜サポーツでの学習についての質問項目＞

「サポーツで勉強することは、楽しいと思う」

サポーツでの勉強への内発的動機づけを調べる項目です。

「これからもサポーツに通うことが、「自分のためになる」と思える」

サポートでの勉強への価値の程度を調べる項目です。

「今の感じだと、これから成績が上がるように思う」

サポートでの勉強についての自己効力感の程度を調べる項目です。

「サポートでは、先生が私に何かを決める機会を与えてくれていると感じる」

「サポートでは、先生は私がどのように行動したいかを知ろうとしてくれていると思う」

これは、サポートという環境の“自律性支援”の程度を調べる項目です。2010年秋のアンケートで用いた2項目（「サポートでは、“先生に理解されている”と感じる」「サポートでは、先生が私を一人前の人間として扱ってくれているように感じる」）は、意味が分かりにくいという声があり、今回新しい項目に改訂しました。

「サポートで勉強するようになってから、やる気が上がったと思う」

サポートの効果を手感的に評価してもらう項目です。

○ アンケートの結果

2010年については33名（小学生12名、中学生17名、高校生4名）、2011年については31名（小学生5名、中学生16名、高校生10名）のアンケートへの回答を分析しました。このうち、2回のアンケート調査の両方に参加し、半年間の変化についての分析の対象となったのは18名（小学生3名、中学生9名、高校生6名：2011年調査時）でした。

各項目について、「全く思わない（1）」から「とてもそう思う（4）」の4点満点の回答を得点化して分析しました（自己効力感項目については「全く思わない（4）」「とてもそう思う（1）」）。

1) 勉強への内発的動機づけ

図1に、勉強への内発的動機づけについて、学習一般とサポートでの学習に対する回答の平均値を示しました。学習一般の平均値は2010年では4点満点中2.58点、2011年では2.55点、サポートでの学習の平均値は2010年では3.27点、2011年は2.97点でした。

また、二時点の調査の回答がある18名の内発的動機づけの得点は、学習一般についての変化はありませんでしたが（2.83点から2.83点）、サポートでの学習については2011年度調査の得点のほうが低くなっていました（3.44点から3.11点）。これは統計的検定（t検定）から、誤差とはいえない変化であることがわかりました（ $t(17)=2.91, p<.05$ ）。

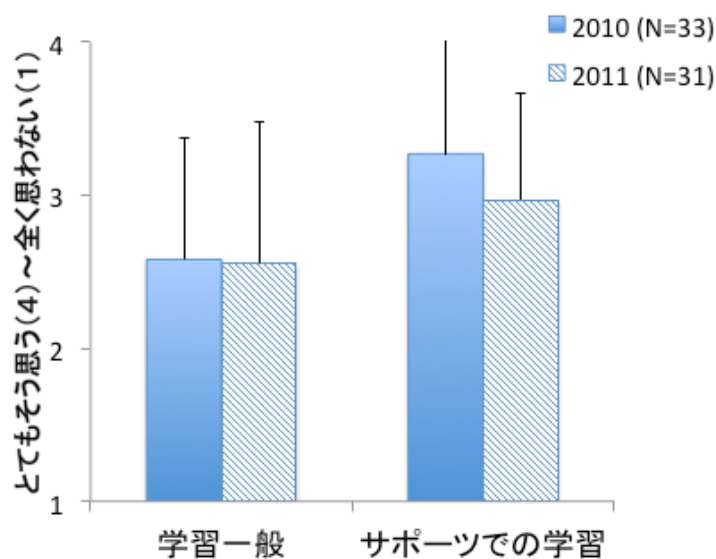


図1 勉強への内発的動機づけの平均値
(エラーバーは標準偏差)

2) 勉強への価値

図2に勉強への価値の項目の平均値を示しました。勉強一般の価値について、2010年の平均は3.27点、2011年は3.61点、またスポーツでの勉強の価値について、2010年は3.56点、2011年は3.44点でした。

また先述の18名について勉強への価値の得点の変化をみたところ、得点は勉強一般についての変化が3.39点から3.61点、スポーツでの勉強については3.71点から3.47点で、どちらも統計的にみると変化していないという結果となりました。

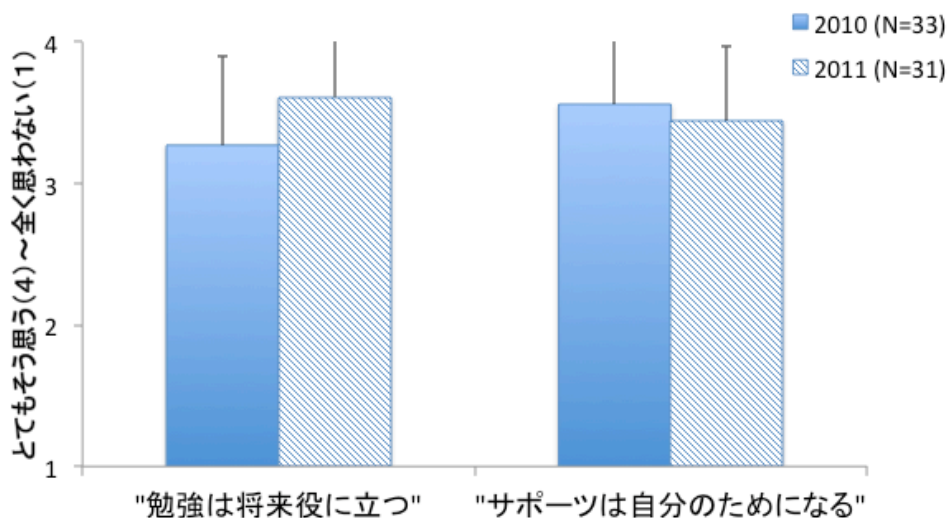
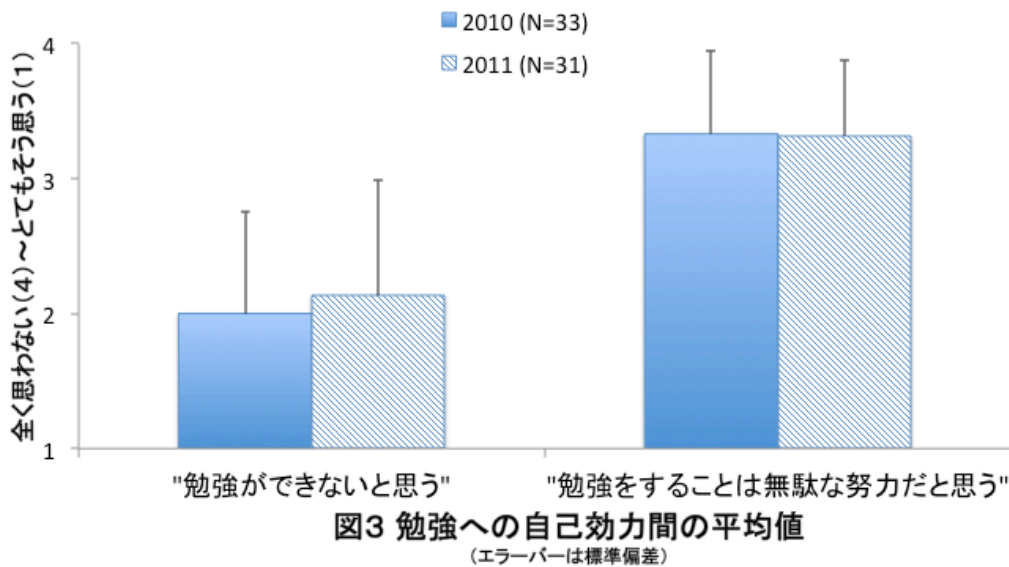


図2 勉強への価値の平均値
(エラーバーは標準偏差)

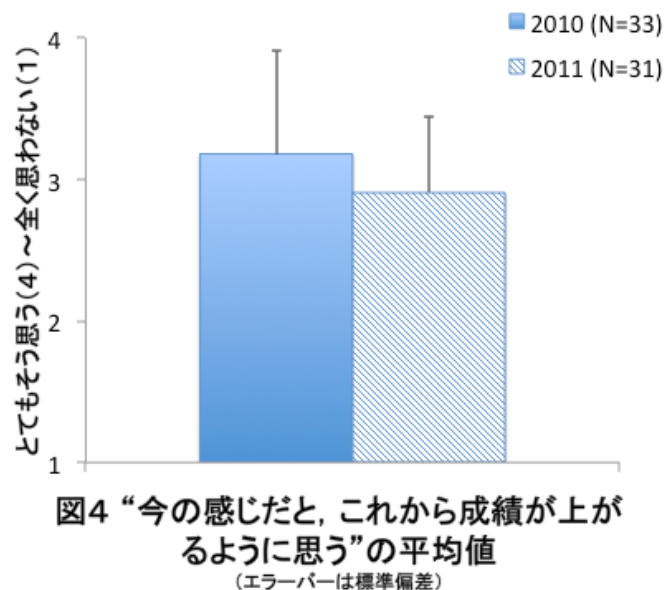
3) 勉強への自己効力感

図3に、学習一般に対する自己効力感の項目の平均値を示しました。どちらの項目も得点が高いほどそう思わない傾向が強いことを示しますが、「勉強ができないと思う」は、2010年の平均値は2.00点、2011年は2.13点でした。「自分にとって勉強することは無駄な努力だと思う」は、2010年は3.33点、2011年は3.31点でした。

2010年と2011年での比較からは、どちらの項目とも統計的に意味のある変化はないことがわかりました(2.11点から2.11点と、3.29点から3.35点)。



次の図4は、「今の感じだと、これから成績が上がるように思う」という自己効力感項目の平均値です。全体平均は2010年が3.18点、2011年が2.91点でした。また18名についての変化の得点をみると、3.28点から2.92点と統計的に意味のある傾向で低下がみとめられました($t(17)=1.91, p<.10$)



4) サポーツの自律性支援

図5は、サポーツという環境がどの程度自律性を支援する配慮をしているかを示す項目への平均値です。項目を改訂したため2011年調査で用いた新しい項目の平均値のみを示しました。「サポーツでは先生が私に何かを決める機会を与えてくれていると感じる」の項目は平均値が2.90点、「サポーツでは先生は私がどのように行動したいかを知ろうとしてくれていると思う」の項目の平均値は3.08点で、前者は70.9%、後者は80.7%と大多数が「少しはそう思う」「とてもそう思う」と答えていました。

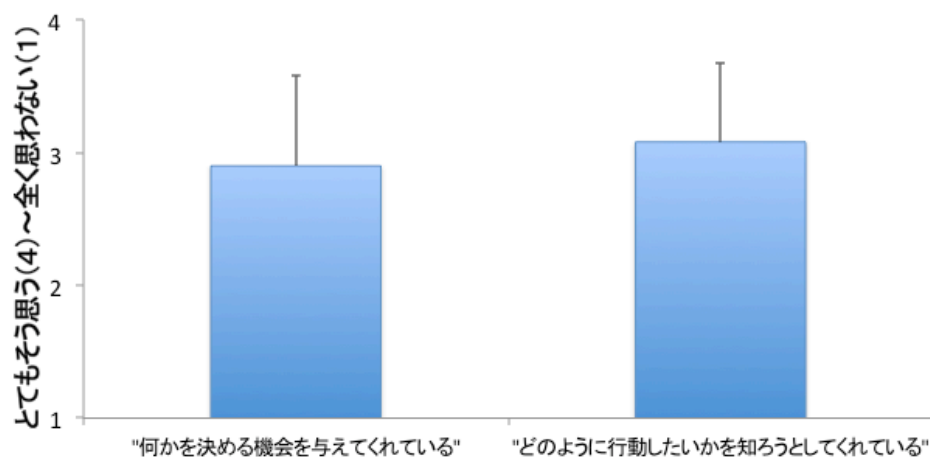


図5 サポーツの自律性支援の平均値
(エラーバーは標準偏差)

5) サポーツの効果についての評価

最後に図6に、「サポーツで勉強するようになってから、やる気が上がったと思う」というサポーツの効果についての平均値を示しました。2010年は3.06点、2011年は3.24点で、2010年は78.8%、2011年は87.1%が「少しはそう思う」「とてもそう思う」と回答していました。18名について、二時点での得点の変化をみると、3.17点から3.36点と上昇していましたが、この変化は統計的に意味のある水準ではありませんでした。

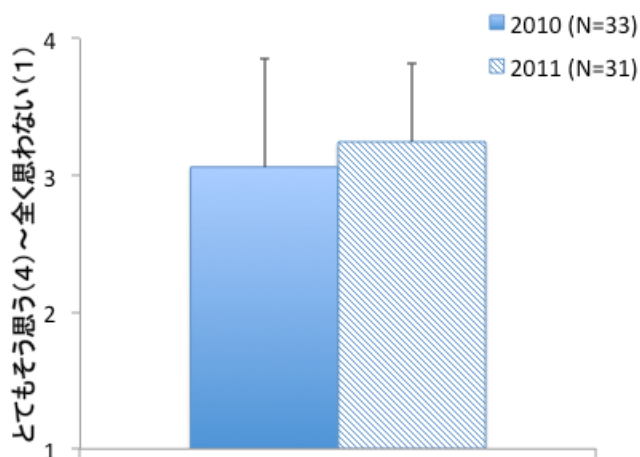


図6 “サポーツで勉強するようになってから、やる気が上がった”の平均値
(エラーバーは標準偏差)

6) 結果のまとめと今後の課題

アンケート結果をまとめると、学習への内発的動機づけや勉強への価値づけの平均値は尺度の中央値(2.5)を上回り、低いというわけではないこと、サポートでの学習に対してはより高い内発的動機づけや価値づけを持っている傾向があること、「勉強ができないと思う」と自己効力感の低い生徒が多いことが2010年に引き続き2011年の調査においても確認されました。

また自律性支援についての2項目への得点は非常に高いといえ、本報告書では示していませんが2010年でも同様の結果がみとめられています。サポートで、生徒が何をやりたいのかということをよく知ろうとしている指導の姿勢があり、それが生徒自身にもよく認識されているといえます。

今回の報告書では新たに、約半数の生徒を対象に1年間で学習意欲がどのように変化したのか検討しましたが、内発的動機づけと自己効力感の項目に得点の有意な低下があり、どちらかといえばやる気が上がっているというよりは下がっていると言わざるを得ない結果となりました。対象となった18名は2010年時点で、特に内発的動機づけは全体平均よりも得点としては平均より高い傾向があり、もともと最高値の「4」と回答している生徒はそれ以上高い得点をつけられないという天井効果も含まれるのかもしれませんが、得点の維持ができていないという現状は否定できません。

なお、生徒の「サポートで勉強するようになってから、やる気が上がった」という認識には変化がなく、上記の学習意欲の低下傾向は、生徒の直感的なやる気の意識の低下によるわけではないといえます。なぜ勉強の楽しさや効力感が上がらないのか、少しでも上げるためにはどうすればよいのかを検討することが、今後の課題であると考えられます。

田中あゆみ
同志社大学心理学部
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3
電話：0774-65-7088（研究室直通）
メール：aytanaka@mail.doshisha.ac.jp